

武蔵野日曜集会

本願に生きよ

——ヨハネ伝第5章1～18節——

1967年10月1日（武蔵野）

小池辰雄

御利益信仰 我々自身は心身の病者 命令・行動の世界 神の本願を受けとる 神の命令は恵みの言葉 再び罪を犯すな 神と共に遊ぶなり 安息日に神の中に休らいながら善き仕事をする キリストと同質にされたことを救いという 即身即主 キリストと同質の霊を頂かないで何が福音か

【ヨハネ5:1～18】

1この後ユダヤ人の祭ありて、イエス、エルサレムに上り給う。2エルサレムにある羊門のほとりにへブル語にてベテスダという池あり、之にそいて五つの廊あり。3その内に病める者・盲人・跛者・瘦せ衰えたる者ども夥多しく臥しいたり。（水の動くを待てるなり、4それは御使のおりおり降りて水を動かすことあれば、その動きたるのち最先に池にいる者は、如何なる病にても癒ゆる故なり）5ここに三十八年、病になやむ人ありしが、6イエスその臥し居るを見、かつその病の久しきを知り、之に『なんじ癒えんことを願うか』と言ひ給えば、7病める者こたう『主よ、水の動くとき、我を池に入る者なし、我が往くほどに他の人、さきだちて下るなり』8イエス言ひ給う『起きよ、床を取りあげて歩め』9この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。

その日は安息日に当りたれば、10ユダヤ人、医されたる人という『安息日なり、床を取りあぐるは宜しからず』11答う『われを医ししその人「床を取りあげて歩め」と云えり』12かれら問う『取りあげて歩め』と言ひし人は誰なるか』13されど医されし者は、その誰なるかを知らざりき、そこに群衆いたればイエス退き給ひしに因る。14この後イエス宮にて彼に遇いて言いたもう『視よ、なんじ癒えたり。再び罪を犯すな、恐らくは更に大なる悪しきこと汝に起らん』15この人ゆきてユダヤ人に、おのれを医したる者のイエスなるを告ぐ。16ここにユダヤ人かかる事を安息日になすとて、イエスを責められたれば、17イエス答え給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』18此に由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思う。それは安息日を破るのみならず、神を我が父といいて己を神と等しき者になし給ひし故な



り。

●御利益信仰

1 この後ユダヤ人の祭ありて、
過越の祭です。

イエス、エルサレムに上り給う。²エルサレムにある羊門のほとりに

羊門はエルサレムの城壁の北東部に当たるといふので、

ヘブル語にてベテスダという池あり、

「恵みの家」という字ですが。

之にそいて五つの廊あり。³その内に病める者・盲人・跛者・瘦せ衰えたる者
ども夥多しく臥したり。

非常に大勢そこに居たわけです。

（水の動くを待てるなり、⁴それは御使のおりおり降りて水を動かすことあれ
ば、その動きたるのち最先に池にいる者は、如何なる病にても癒ゆる故なり）

5ここに三十八年、病になやむ人ありしが、⁶イエスその臥し居るを見、かつ
その病の久しきを知り、之に『なんじ癒えんことを願うか』と言ひ給えば、

⁷病める者こたう『主よ、水の動くとき、我を池に入るる者なし、我が往く
ほどに他の人、さきだちて下るなり』

遅れてしまうからダメだと。

8イエス言ひ給う『起きよ、床を取りあげて歩め』⁹この人ただちに癒え、床
を取りあげて歩めり。

例のごとく非常に簡潔に書いてあります。あの辺は温泉があまり出ないようですが、温泉
であつたか、鉱泉であつたか。とにかく、この時代には、あの一帯に火山的な現象があつ
たことは、どうも聖書を見ていると、いろいろ火のことが出てきますから、考えられるわけ
です。それが間欠泉の現象であると普通、註解書も言っているようです。あるいはそうで
しょう。しかし、間欠泉の自然的な現象であるにしろ、そういう現象において昔の人は、
ただ自然科学的な現象として見ずに、それにおいて天的な働きがそこにあると、そう受け
とっているわけです。

我々の普通の生活でも、何でもない現象において何か特別なことを見ることがある。そう
いった相対的な現象をとおして、ある絶対的な角度のものがそれを契機として顕れる、と
いうことは考えられることです。とにかく、そのときの民間信仰としては、その天使の働
きに触れると何でも癒えてしまうというわけで、この病人も待つていた。ところが、自分
は動けない。自分を動かして連れて行ってくれる者がいないから、どうにもなりませんとい
うわけです。民間信仰でもとにかく一応、信仰の世界というのは、信ずればある働きがそ



ここに起きるといふことはある。いつも御利益信仰ごりやくです。ところが、イエスはその御利益信仰的な現象の、そこに動いているところの心の動きは非常に大事なものと見られたわけです。ただ内容がいかに素朴な、まだ低い次元のものですけれども。問題は、その三十八年、中風で病んでいた人の切なる求め、治りたいという切願です。この「治りたい」という言葉は、「汝、癒えることを望むか」「治りたいか」と訳してありますけれども、原文はむしろ、「健全になりたいか」と、もう少し積極的な意味を持っていると思われまふ。「健やかになりたい」という、非常に切なる悲願を持っている。

●我々自身は心身の病者

私たちは元気なときは、病人でないと、確かに健やかで健康であると思つています。しかし、いつも実は病気にさらされているところのものである。いや実に、何らかの意味において、その中に病気を持っていて、その病気と戦つてにすぎない。我々が本当に文字通り健康そのものであるならば、その肉体は同時にやがて霊体にまで化するようなことになるわけです。けれども、どんなに健康な人でも、ただそれだけでは、やがて死ななければならぬ。実は、

「健やかなる者は医者を要しないで、病める者が医者を要する」

と、キリストが言いました。

「お前たちは自分たちを健やかと思つているから医者が要らないんだろう。しかし、私は病める者を癒そうとしてやつて来たんだ」

と、傲慢なパリサイ連中に対してそう言われたわけですが。実は本当は健やかではない。

「健やかと思つている者が逆に病人で、病めると思つている者が逆に健やかである」

と言つても構わないくらいな、

「目明きが目くらで、目くらが目明き」

といういつたようなことであります。我々自身が実は病んでいる。心身ともに病んでいる。心も肉体も病んでいる。心身の病者です。心の点でも、いろいろ思い悩みとか、苦しみとか、すぐ怒つてみたり、いろいろな現象が起きることは心がまだ病んでいる。そういう意味において、あるがままの私たちは何らかの意味において心が病んでいるし、身体も病んでいる者である。ここにいるところの「三十八年病に悩める人」をよそごとに考えることはできない。

いつも申し上げている通り、聖書は三人称的に読んでいたらダメだ。いつも一人称で読む。自分がその人である。それがキリストに今立ち向かつていくという、その劇的な事態の、その劇中の人に自分ならなければ、聖書は本当に読めない。でありますので、我々は聖書をただ勉強したり、こちらが教えたり、あるいは学んだり、そういうことではない。



あなた方と、語るも聞くも同じこと、ただこの世界に本当に立ち向かって、そこで今我々は、それを読みながら、キリストに本当にぶつかっているかどうか。近頃は、「出会い、出会い」なんていう言葉をよく使いますけれども、あまり軽々しく使われている。本当にキリストに出会っているか。本当にキリストに出会う、そういう心で、体勢で——ただ心ではダメです——全体勢をもって、全身をもってこれに今立ち向かっているかということであります。

38年であろうと、何年であろうといい。とにかく、非常にどうにもならないという、極限状況にあるわけです。限界状況にある。手放しでは、どんなに健やかであってもダメなんです、我々は。「健やか」というものはもつと別なものを持っている。

お医者さんの薬は結構です、大いにやってください。お医者さんはなるほど治す。けれども、本当のお医者さんは言う、

「人間が治るのはやはり何か自然が持っている力によったものが非常に多い。薬はただちよつと助けにすぎない」

と。補助的手段として結構です。しかし、手段ではなくて本道だね。本道として我々の心が本当に健やかになるためには、人間の作りだしたいかなるものもこれを与えることができない。それははつきりしている。この一番大事なものを忘れて、二義的、三義的なものに一生懸命でやっている、それに囚われてしまう。私は胃腸を患ったときに、自分の経験で知っている。いろいろな薬を飲んでみるけれども、一向大したことはない。それで、あるときに薬を全部やめてしまった。そして、この生命の世界に入ったら、それからもう楽になってしまった。そういうことで、何も薬をやめることを奨励しているのも何でもないが、大事なことは、一番本当のことを忘れては大変だということですよ。

●命令・行動の世界

もちろん、「天使」という存在はありますよ。とにかく、水が動きだす時には天使が来たと彼らは思うわけだ。いいですよ。本当にそう思えばそういうことが起きるから。それはまあ低級な御利益信仰です。キリストは、その御利益信仰的な彼らをもうひとつ深い、本当の力の世界、本当の生命の世界に持って行くという。

「そんなのはうそだよ」
なんて、キリストは言わない。

「結構だね。その切願は大事だ」

と。今、それらの人たちの心を動かしているから。疑わしてはいかん。「それは間欠泉だ」なんてキリストは言わない。天使が動く心が動くまいが、水が動く心が動くまいが、そんなことはキリストには問題ない。問題は、神さまの御意が発動することです。

「汝は健やかにならんことを願うか」



と。この場合はもちろん、この「健やかになる」という内容は、38年の病が癒えること、それにその人は心がいつぱいなわけです。いいですよ。「だけれども……」なんて言っているんだ、まだこれね。「そうです」と、いきなり言えばいいのに、

「だけれども、水が動く時に、こういうわけでダメなんです」

なんて。よほど残念に思っているわけだ、みんなが先に池に入ってしまうから。正直にそう言った。

新しい口語訳は、気が抜けてしまって困る。

「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」

と。「起きて」なんて言って、なにかそのところを説明しているような調子で言っていますが、この三つの言葉は全部、命令形です。キリストは、

「起きよ」

と言って、ただそれでいいかと思つたら、それからキリストは、

「床を取りあげろ」

と言う。「床を畳んでどこかへ上げてしまえ」と。まあえらいことですよね、病人に。そんなことは考えられない。「担いで除けろ」という気持を持った字です。それから、

「歩き回れ」

と。

「起きろ。床を取り除けろ。そして歩き回れ」

と。まず驚きですね。

昔の軍隊は——今は軍隊は日本にはない——命令一下すべて動いていく。有無を言わせない。「突撃！」と言えば、

「今、向うから敵がバラバラ来ますから、ちよつと待つてください」

なんてことはない。突撃です。「止まれ！」と言えば止まる。自分は判断しない。もう直下に行動に移るわけです。そういった命令直下に行動に移るような世界が、これが絶対命令に対して絶対服従というやつ。絶対命令に対して絶対服従だから軍隊は行きます。そして、昔の軍隊は、天皇陛下の命令はもう絶対ですから、

「上官の命令もまた天皇の命令とせよ」

なんていうことが軍人勅語に書いてある。

そういう気合の世界を今の若い人たちは知らない。その良し悪しは別問題です。すぐ、話し合いです。話し合つて、それから理解して、折りをつけて、それからやりましょうと。それが民主主義であるというわけです。それは民主主義も結構ですよ。けれども、「命令・行動」という世界が全然なくなってしまうです。もちろん、昔の封建的なものは良くはないけれども、この命令・行動の世界に実は信仰の世界がある。信仰の世界はこの命令・行動の世界なんだ。だから、隊長を頭から信じて動けと。信仰というのは、仰いでたつてダメだ。



信じて行わなくてはいいかん。直ちに行動に出る。「信動」でもいいよ——こんな言葉はないが——「信即行」と私が言っているのはそのことなんだ。実は、キリストが言った言葉を直ちに受けとる、それを全身をもつて受けとることが即ち、内的な行動である。内的な行動であるから、直ちにそれが外的な行動に移るわけです。全身を託するわけです。

●神の本願を受けとる

キリストは生ぬるいことを言つてやしない。「起きよ」と。

「私を信ずれば、お前は多分、起きられるであろう」

なんて、そんな二段構えのことは言わない。それは、その人が健やかになりたいという悲願を、全身で打ち込んでいるところのその悲願をみたからです。

いつも申し上げている通り、祈りとは、己をそれに、あるがままの自分を投じ出すことを祈りという。あるがままの自分を——何か整える必要はない——あるがままの自分をそこに投げ出すことが、それが祈りである。だから、全身全霊をそこにあるがままに投げ出す。投げ出して、なんとか健やかになりたいと。この気合をキリストが見たから、

「起きろ」

と命じた。「起きろ」と言うキリストは神さまの力をそこに頂いていますから、神の霊を頂いていますから、この「起きろ」という言葉にもう既に霊的な力が入っている。霊的な力が入っているから、これに願っているのが本当にとりつくわけです。

「38年間寝てたのに、『起きろ』と仰るけれども、私は起きられるでしょうか」

なんて考えたらダメです。それでは願いが行き詰まってしまふ、水を割られてしまふ。常識と今までの経験とを乗り越えてしまふ。全的にそれを受けとる。自分の経験や常識に対して、「否」と言う。

「あなたは本当だ。私の経験や常識やいろいろな考えは今、棄てます」

ということがもはや意識の奥の世界で、パツと瞬間的に片づいているわけです。だから、「よしっ」と、無条件です。そこにくると、未来完了を現在完了に直してしまふ。そして、起きたばかりでなくて、床を取り上げて片付けてしまふ。そして歩き回る。もう池の水の動きも天使もへつたくれもない。そんなものは乗り越えてしまふ。即ち、いわゆる御利益信仰を乗り越えて、本当の神の本願を受けとる。キリストを通して神の本願を受けとる世界にきた。福音的な事態にきた。相手はキリストでありますから、神ですから。

神の本願ということ。何を契機としてもいいですよ。始めは逡巡するけれども仕方がない。しかし、現象が起きたからそれでいいとしている人は、いつまでたってもダメです。やはり、御利益信仰から本願信仰に、キリストの本願、神の本願を、御意を受けとることになる。

「御意を成させたまえ」

なんて、みんなクリスチャンが言っているけれども、そんな傍観的な気持で、「御意を成さ



せたまえ」なんて言ったってダメですよ。自分を投げ出して、本当に「汝の本願成り給え」

と言うと——私はこの「本願」という言葉が好きだから、そういうふうに言う——何かしらないけれども、その告白のもとに力が来てしまう。自分の今の状態がどうであるというのである、そんなことは計算に入らなくなる。

「汝の本願成り給え。この私の中に、皆さん一人びとりの中に成り給え」

というのが即ち、

「起きよ。床を取り上げて、歩め」

と。こういう絶対命令の力強い言葉でなければ、捨身にならない。

どうぞ、皆さんは、この訳は気の抜けたような訳だったが、その奥を自分で読まなければダメですよ、聖書の文字なんかには囚われていたら。霊眼をもって読まなくては。

そういうことで、天使信仰から神の本願の信仰に切り替わってしまった。そういう鮮やかに、いわゆる宗教から福音に変わってしまったわけです。

● 神の命令は恵みの言葉

それが間欠泉だか何だか知らんけれども、うちに火を持つ。うちに温泉を持つ。温泉は癒す力を持っている。私たち自身が即ち、キリストのこの霊言に触れて立ち上がると、霊泉が湧き出ることになる。何かしらんが、内から霊泉が湧き出ているような人間にならなかったら、それはクリスチャンではありませんよ。今のキリスト教なんていうものは大体もう死火山であり——このベテスダも今はダメなんだ、今は涸れてしまっている——涸れ泉である。私たちはこの霊泉的なキリスト者にならなくては。キリストの言は、

「わが言は靈なり生命なり」

という。「御言、御言」なんて言っただけ勿体ぶったってダメです。聖書を読んで、このキリストの言において、使徒たちを通して、預言者たちを通して、表れているこの神の言において、そこに「靈なり生命なり」を受けとらなかつたら、何回読もうが、暗唱しようが、いくら聖書の研究をしようが、一向にダメであります。

「聖書を読みながら、何かしらんが、本当に力が入ってきます」

ということになったら、その人は本当に聖書を食らっている。文字を食らい飲んでい

それは何かという、さつきから言っている通り、人間の何者も与えることのできない生命を聖書は与えようとしている。その言葉の背後から。だから、それに対するもの凄い悲願をもって生きていくことは、自分を投入していく祈りです。あるがまま投じいでるところの、ドラマの中に自分を入れるこの祈りをもって読めば——「祈り」という言葉がまた躓きになってしまう。自分がじつとしていて、ただお祈りすることが祈りかと思っ



ているような体勢で行くことが祈りですから——それで聖書の文字ならざる文字にぶつかっていけば、必ず力が出てくる。神の中に投入している人が——キリストが、預言者が、使徒たちが——発している言葉に対して、それと同じ投入をしないで、どうしてこれが受けとられるかということですか。それで、

「起きろ。床を取り上げる。歩き回れ」

と。そういう言葉にぶつかったときに、なんと楽しいことだなあと。命令が実は驚くべき恩寵の言葉である。驚くべき恵みの言葉である。「恵み」ということを、何か優しいもの言い方をしているかと思うが、そうではない。もの凄い迫力をもつてこれを与える。力強い恵みです。キリストの言葉には烈しい言葉が満ちている。実は、人間のどうにもならない現実をひっくり返すための言葉ですから。これは非常な恵みなんだ。この命令において恵みを受けとらなかつたならば——

「嫌だな。命令に従うのは」

なんてでは——いつまでたつてもダメです。命令は実は実力を持った命令ですから、それは直ちに恵みである。軍人の世界ではそうはいかないが、福音の世界では、神の命令は実は恵みの言葉である。

私たちは、この霊泉を頂いて湧き出でれば、ここに自分のもはや心身が病んでいることは心配要らん。どしどし、この心身の病は癒されつつ進んで行きます。変質変貌させられていく。そんなことを気にしていたらば、霊泉がまたダメになる。いよいよ喜び、泉をいよいよ求め、進んで行くわけです。

●再び罪を犯すな

その日は安息日に当たりたれば、¹⁰ ユダヤ人、^い医されたる人という『安息日なり、床を取りあぐるは宜しからず』

と。またユダヤ人というのはこういうことが非常にうるさい。出エジプト記16章に出ている。「²³モーセかれらにいうエホバの言いたもうところ是のごとし、明日はエホバの聖安息日にして休息なり。今日汝等焼かんとする者を焼き、煮んとする者を煮よ、その残れる者は皆明朝まで蔵めおくべし。」(出エジプト16・23)

本当にその通りなんです。向うは、こちらでいうと、金曜日の夕方から安息日になるから、土曜日の夕暮れまで。煮炊きはそれまでにやって、絶対に安息日に煮炊きはやらない。

「²⁶六日の間汝等これを集むべし。第七日は安息日なればその日には有らざるべし。」(出エジプト16・26)

と。安息日というのは非常にややこしく考えている。とにかく、安息日にはいろんなことをしてはいかんと。今でも、電車も自動車もみんな止まってしまふ。あいかわらずユダヤ人はこれをやっているんだ。キリストが今から二千年前にそんなバカらしいことは破つ



てしまった。それだから、キリストをいよいよ十字架にかけるようなことをしたんですね。

11 答う『われを医ししその人「床を取りあげて歩め」と云えり』¹² かれら問う『「取りあげて歩め」と言いし人は誰なるか』

そんなけしからんを言うのは誰だと。

13 されど医されし者は、その誰なるかを知らざりき、

それがイエスであることが分からない。とにかく治ってしまったというだけのはなし。

そこに群衆いたればイエス退き給いしに因る。

もう大勢いましたから、うるさいから、キリストは彼を癒して、そしてどこかへ行つてしまつたわけです。

14 この後イエス宮にて彼に遇いて言いたもう『視よ、なんじ癒えたり。

「どうだね、治つてしまつたではないか。健康になつた」と。

再び罪を犯すな、

妙なことを仰つたね。「再び罪を犯すな」と。そうすると、この38年病んでいたその病の原因は何か霊的な罪らしい。内容は何か分かりませんが、キリストにはその罪が見えるから、「罪を犯すな」と。一番恐ろしい罪は聖霊に逆らう罪です。これは赦されない。

「私のことを悪口言つたつていいが、聖霊に逆らつたらダメだぞ」

と、キリストは言われた。我々も、しかし時たま、聖霊に逆らうことをやる。そうしたら、

「聖霊に逆らつたからもうダメだ」

というわけでもない。本当に平伏して、贖罪のキリストに無条件に平伏すよりか仕方がない。聖霊に逆らい放しで神の霊を冒瀆する者は、これは亡びにいく。

「自分は無神論者である」

なんていうことをよく平気で言っている人があるね。論者であつたつていいよ。論なんか論じたつてどうにもならない世界です。まあ、無神論者ならまだ赦されるけれども、

「神なんかあるものか」

と言つて嘲あざわらるようなことになつてくると、それは霊を嘲つていますから、これはその人が困つたことになる。実は、そういうことは自分の心を嘲つてことになる。魂や心の世界は常に霊の世界に通じている世界です。自分の心を否定しているのと同じことになる。

恐らくは更に大なる悪しきこと汝に起こらん』

キリストに救われて、それでまたその恩寵の世界から自分がそれを棄てて、信仰を得たと思つたらそれを棄てて行くと、なおさら悪くなる。このことはヘブル書にも書いてある。

「もう救いようがない」

というようなことまで言っている。けれども、本当にキリストの聖霊に触れたならば、聖霊のバプテスマを受けたら、もう信仰を棄てるも何もなくなくなるわけです。信仰というものをなにか自分で何ものかと思つていませんから。



自分で信仰なんてものを何ものかと思ってみたり、「自分の信仰をもっと強くするんだ」なんて、一生懸命で信仰いじりをやったら、それはダメになる。逆説的な言い方をすると、実はそんな「自分の信」に死ぬことが、そんなものを棄てるのが、本当の「キリストの信」に生きることである。キリストの信。これがもう絶対なものですから、キリストが神に信じたこの信は。キリストは信仰体ですから。信仰体なんだ。この信仰体から来るところの霊を受けたらば、この御霊を受けたらば、もはやそこにおいて本当のキリストの信が入ってきていますから。

「この信を何者が否定することができるか」

ということが言えるようになるわけです。自分で信仰を私しているような信仰ではない。

そういうようなことになったらば——まあ人間ですから、それでもなお躓いたり転んだりしましょう——けれども、躓いても転んでも、必ず磁石が北を指すように戻ってくる。そして、なおさら今度は前進を始める。もちろん、躓いたり転んだりすることがいいと言っているのではない。そのときは本当に平伏して進んで行く。

「どうも私はダメだな」

と言って、自分のダメさ加減を見ていたら、いよいよダメになる。

「いや、私はこのようにダメだからこそ、いよいよキリストである」

と言って進んで行く。そういうた本当の積極性が出てくるわけです。

●神と共に遊ぶなり

15 この人ゆきてユダヤ人に、おのれを医したる者のイエスなるを告ぐ。16 こ

こにユダヤ人かかる事を安息日になすとて、イエスを責めたれば、

「お前はけしからん」と。

17 イエス答え給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』

よくこの頃、「アルバイト」というね。これは本当のアルバイト(労働)。「バイト、バイト」なんて言ってますが、学生諸君が本当のバイトをしてくれなくては困る。それは「父と共に」バイトをすることです。キリストは父の力で、神の力で——「今にいたるまで」とは、「あいかわらず、いよいよもつて」というような言い方です——あいかわらず、どんどん、自分は働くのであると。けれども、働くことがもはや苦しくはない。楽しい。働くことも、勉強することも、「アルバイト」(働く)が「シユピーレン」「遊ぶ」こと。

「神と共に遊ぶなり」

と言ったついでに。

「私は神さまと共に遊んでいるんだよ」

と。いつか内村先生が

「伝道は道楽である」



なんて言ったことがある。本当の伝道は——道楽と言ったらおかしいけれども——楽しい道なんだ。私は学校で言う、

「あなた方、勉強するなんて思ったらダメだよ。遊ぶんだ。教場で遊ぶ。そつぽを向くことではない。本によく親しむ。本に親しむことが即ち勉強である」

と。何でも楽しみや喜びがそこに伴わないものは本ものにならない。消化しない。

「このご飯は何カロリーあつて、栄養素が何と何があつて」

なんて計算して食べたら、身につかない。大事な味は何かというと、自分の心が楽しいことです。楽しい心をもつて食べれば、同じカロリーのものでも身になり方がちがう。なにか不平を持ったり、何かして食べたら、今度は逆にそのカロリーがマイナスになって響いてくるでしょう、おそらく。毒になる。

アダム・イブはパラダイスで遊んで何をしていてもよかつたんだが、

「禁断の果を食べたから、外に出されてしまって、それから額に汗して働かなくてはいかんことになった」

なんていうことが創世記に書いてある。あれは呪いですよ、あの働きは。けれども、キリストにあつては、働きはもはやそういった呪われた事態から来たのではなく、

「神と共に今日も明日も次の日も進み行くなり。働かざるを得ない」

というわけです。

「よく学び、よく遊べ」

なんて言うね。内村先生が色紙に

「善学善遊」

と書いた。けれども、もし私が書くならば、

「学遊一如」

とでも書く。学ぶも遊ぶも同じことである。

「動中に静在り、静中に動在り」

と。働きながらちゃんと休む呼吸が入っている。あくせくしない。電車の中でもどこでもこれが書齋である。と同時にどこでもまた寝室である。眠ろうと思えば眠れる。そういう自在な在り方になってくるわけです。学ぶことが楽しい。小さい子どもが何かおもちゃで遊んでいる。本当に無心になって喜んでいる。あの子どもの遊んでいる姿が本当の姿だよと。

「おきな幼児のごとくなれ」

というのはそのことです。すぐ賃金を考えて労働争議を起こしたりなんかしない。

「毎日、本当に楽しくみんな働いてくれる。それでは少し賃金を増してやろう」

と。お互いにそういういった気持ちになってこなければ、本当の労使の関係も出てこない。すべてがそうです。信愛関係です。人間のすることは、そういう魂の信愛が通じなかったらば、どんなに規則をつくらうが、決して本当のところには来ない。



「仕事を頼んでも、一言も不平を言わないでニコニコ笑ってやっている。なんと素晴らしい人だろう」

と、上の人が頭を下げます。「よし、大いに褒美をやろう」ということになる。すぐ計算をして何かをやつて、話し合いをして要求を通そうとする。話し合いならまだいいけれども、話し合いどころではない。暴力を背景にして、とうとう学長を吊るし上げにまでするような、そういう悪いことをする学生は一体、学生という名前に値するか。とんでもない。

●安息日に神の中に休らいながら善き仕事をする

信愛関係をもってすべては、神と本当に一つになってキリストは、安息日に神の中に休らいながら、善き仕事ができるんです。

私たちがこの日曜をこうやつて集会をいたします。

「これはもう何があつても集会に来ましょう」

という気合が必要です。けれども、それは律法ではない。

「今日はどうしてもこのことをしなければならぬ」

ということなら、来なくてもいい。しかし、そのことにおいて本当に神の栄光を表わしていく。何かここに来ないことのひとつの言い訳のようなことではダメです。魂の世界はごまかしがきかないから。

「今日はどうしても集会に行けません。けれども、そこで同じく集会に連なつた礼拝をしたと思います」

ということなら、はい結構です。そういう在り方なら、何をか言わんやです。けれども、できることなら、いろいろな事情を乗り越えて来ることです。

「来客が来たからどうしても行けません」

なんて、そんなのはダメだ。その来客を引つ張つて来たらしい。

「私は日曜は命懸けなんだから集会に行くんです。あなたもよかつたら来なさいよ」

くらいなことを言わなければ。そうしたら、その来客に本当に伝道ができてしまう。とにかく、「どうであれ」なんてことはひとつも私は言いません、具体的に「どうであれ」なんてことは。問題は、本当に安息日を神のうちに休らい、神の力を現し、受けとる、そういう根本的な精神をもって生きるかどうかということなんです。

日曜のこの礼拝は私たちの6日間の原動力だ。これは始めの日なんだから、終りの日ではない。そして、6日間を進んで行く。何もこの日曜だけではない。6日間の1日1日にももちろん原動力をいくらかでも頂いて行きます。そういう気持で皆さんとこの聖書にぶつかっている。キリストのこの現実をいい加減な気持で読んでない。ただ註解書の言っていることを講義したって何になるか。事柄のいろんな枝葉のことはどうぞいくらでも註解書を読んでください。そんなことを私はいちいち言いませんから。



●キリストと同質にされたことを救いという

「わが父は今に至るまで、今もなお働き給う。我もまた今もなお働いていくのである」

という。

¹⁸ 此に由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思う。

安息日にそういうことをしたら、もうけしからんと。

「安息日を破る者は死罪に当たる」

と旧約聖書に書いてある。だから、殺しても差し支えないというわけだ。

それは安息日を破るのみならず、神を我が父といて己を神と等しき者になし給いし故なり。

神さまのことを「父」と言って、自分をその「子」だとしている。父子というのは正に血がつながっているから同質だという。神さまと等しい者、同等である。エックハルトも、

「神と同等にならなくてはダメだ」

なんていうことを言いましたが。同等は、我々の言葉でいうと、同質ということですよ。

プロテスタントの信仰で、

「我々は罪びとで神とは断絶している」

と、そんなことばかり言っている。

「神とは質が違う。キリストとは質が違う」

と言って、異質であることばかり強調している。

「罪びとは決して義人になれない」

と、そういう面ばかりをどうもとかく強調しすぎて、大事な面がぬけている。だから、仕方がないから、

「十字架でそれが赦されて、罪が贖われる」

という命題的な信仰です。「十字架」というなら、誰よりも深く受けとってくださいよ。

「われキリストと共に十字架せられたり」

とパウロが言ったように、十字架されたという、死にきららない自分に本当に死んでいるという、その恩寵を受けとれば、

「さあ、私を受けなさい」

と。なぜキリストは甦って、あの驚くべき生命をそこに現象したか。霊体として霊的生命をそこに現象しているか。

「さあ、体当たりに祈ってこい。私がお前の中に入ってくるから」

と。それが聖霊降臨でしょ。だから、この御霊を本当に受けとって、そして、この霊生が——さっき言った霊泉でもいい——霊の生命が入ってくれば、これが一つになる。キリストの霊だから、私たちはキリストと等しいものを持っている。等しいものを持つまでは、



救われたとは言えませんよ。ただ、

「まあよしよし、私はお前を天国に入れてやる」

なんて、こっちがまだ暗黒のままでしたらダメだよ、そんなのは天国へ行つたつて、また落つこちてしまう。キリストと同質にされたことを救いという。

「私は本当に救われました。私は本当に自由になりました」

ということとは、同質なものを頂いたことです、皆さん一人びとりが。

「私は、キリストと同じものが私の中にあります」

と言える。「生意気なことを言うなあ」なんて、そうじゃないよ。これは恩寵で来ている。キリストが

「それをやろう」

と言うのに、「それは要りません」と言つたら、しようがないよ。

「無条件でやるよ。私は無条件でお前の罪を贖つたんだから、そこに今度は無条件に私が持つている聖霊の生命を与えるよ」

と。そうしたらば、

「ペテロ、お前は今は躓いてしようがないけれども、今度は本当のペテロになるぞ」

と。キリストは先が見えているから、躓いたペテロをなおその先を望んで言っておられる。

●即身即主

パウロはそれを持たないくせに、

「俺は神さまの素晴らしい霊的なチャンピオンでござる」

なんてやっているから、キリストは

「お前の熱心は結構だが、とんでもない傲慢な熱心だ」

と言つて、そんな傲慢な熱心をひっくり返してしまった。

「なんぞ我を迫害するか。私を通らないで、どうして本当の世界に入れるか。とん

でもないはなしだぞ」

と。そこでパウロは本当に眼から鱗が、いや実に彼の魂の奥底から霊的な癌が取れてしまった。この傲慢というやつは霊的な癌だから。

精神的にも非常に自我の強い人は癌になるかもしれない。気をつけた方がいい。癌というやつはいろんな原因を持つているらしい。信仰もあまり自己弁護的な凝り固まったパリサイ的な信仰になると——だからきつとパリサイの中には癌もだいたいと思おう——しこりができてしまつて、肉体的にもそれが生じてくる。そんなことを言つて、私も癌になるかもしれないけれども。

「そらみる。小池先生なんて結局ダメじゃないか」

なんて（笑）。自分が本当に砕かれて、キリストの十字架の砕けそのものを頂いて、砕けの



魂とされたら、しこりのない魂とされたらば、身体もしこりなんかもみんな取れてしまうよ。聖書においては、霊肉はバラバラではありませんから。これはこの御霊の信仰に入ると、皆さん、自分でお分かりでしょ。何かしらんけれども、身体が楽になってくるし、力が出てくるし。なにかものの理解も、また創造的な力も、いろんなものが今までとはちがつて、出てきてしょうがない。不思議なことです。本当にそうです。神さまと同質になるんだから。神・キリストと同質になっていく。だから、

「即身即主」

と書いたわけです。この身がそのまま主に即する。即身即主というのは、その中心が主に即するので、「全部、主と同じになりました」なんていうことを言っているのではない。我々はいいかかわらず、罪びとです。それでも、主に即した者が、御霊がそこに入ってくるから、即身即主ということが言える。仏教の世界でも最後はそこを言っている。

「煩惱即菩提」

なんていう言葉はそこから来ている。煩惱を煩惱として問題にしているうちはダメだと。

キリストがもし父に等しくなかったら、どうして福音がありますか。だからもう、ユダヤ人のこういう判断はとんでもない間違いをしている。今でもあいかわらず、イエスを救い主「メシヤ」とはしない。全く彼らの心は、精神は癌だね。ユダヤ人はパリサイ的な癌にとらわれている。イスラエルの人たちがこのユダヤ教から、

「俺たちは間違っていた」

と言つてひっくり返つたら、どういうことになるでしょうね。パウロはそのことを待ち望んでいる。彼らの中から出た最大のチャンピオンがかくも明らかにしていることが、どうして受けとれないか。我々にはそのことがほとんど不可解と思われるくらい不思議です。

●キリストと同質の霊を頂かないで何が福音か

私たちは今日ここで受けとったように、この恩寵の世界を端的に行じていくこと。受けとれば必ず力が来て、行為なんて言わなくなつて、もうそこに生じてくる。もう二段構えでない世界です。押し出される。そういつたところがやはり、働きということがもう楽しい遊びと同じである。どうぞ、そういう心境の人にいいよなつてください。そうすると、どんなに忙しくても、不平なんかはなくなつてしまう。黙って仕事ができる。キリストを受けとつたら、何と自在な人になるだろう。

「キリストと同質の霊を頂かないで何が福音か」

ということがはつきりしている。今、キリスト教界で一番欠けているものは、盲点は、この聖霊の同質の世界に入らないこと。これを大胆率直に受けとつていかないということにある。いつも「罪、罪、罪」と言つて、自分の暗いところを見ていると、いよいよサタンに乗せられてしまう。



ヒルティが『眠られぬ夜のために』の終りの方に、ちょうどこのヨハネ伝の5章6節を引いて、「汝、健やかならんことを願うか」という一文を書いている。私はそこに私の訳で自分で、「なりたいのか」なんて訳してしまったんだけど、それは実はうまくなかった。むしろ、「健全になりたいか」と、少し硬くても、そういう訳の方がよかった。

「我々は今や、教養ある人々をまず次のことに関して次第にまた説得することが出来なければならぬ。すなわち彼らが超感覚的な事物への信仰なくしては彼らの人生的な目的を決して達し得ないということ、しかもそればかりか、その肉体的健康さえ彼ら自身及びその子々孫々にとつても決して保持し得ないということである。」

と、はっきりヒルティはそう言っています。そのためには本当にキリストを受けよと。しかも、

「すぐ十字架で気休めしているような信仰があるがダメだ」

というようなことまでヒルティは書いています。

「そういう気休めではなくて、本当に霊の生命を受けろ」

という角度からここにも書いています。

「やがてそういう本当のキリスト教を必要とするときが来るぞ」

と予言しています。

「このキリスト教こそまさに現代が要求し、幾千の人が衷心から本能的に熱望し、近き将来に期待するものである。なんとすれば、かかるキリスト教に優るものはなく、ただこれのみが現代世界を有効に改良し得るからである。」

と。そういった生命的な福音のことをヒルティが言っている。

「すなわち今や重要なことは、信仰告白や

いわゆる信仰告白ですよ、信条的なね。

教会的形式を大いに改革することではなく、むしろ全く健全な自然な、ひとを悦ばせ

忍耐強くし、誰にでも善意をつくすキリスト教をば体現することである。」

というような言葉も出ているわけです。最後のところには「ボエティウスの祈り」という詩が載っている。

「汝、永遠の計らひにより万象の存在を統御し、

天地を創造し、原始より時劫を導く者よ、

父よ、我をもまた明朗なる高所に到らしめよ、

救いの泉に飽きたり、光に向いて歎呼しつつ、

厄災じやくわいより免かれ、地上の物質の重みより解かれて、

恵まれたる霊眼を永遠に汝に注ぎつつ。」

（いわゆる「ボエティウスの祈り」より）

ボエティウスという、ちょっと霊的な哲学者の祈りをもって最後は終わっています。

